

三十二歳のダンは、娘へのクリスマスプレゼントを探して街じゅうを走っていた。娘は「セルモ」というお人形をほしがっていた。クリスマスシーズンに入ってからというもの、彼女は「セルモ」のことばかり喋っていたのだ。

ダンと妻との間はうまくいってなかった。ここ半年ほど、夜の営みは拒絶されてきた。ここはひとつ、娘を喜ばせることで、仲直りをしたい。

だが、「セルモ」は大変な人気で、見つけるのは至難の技だった。ダンはずでに十軒の玩具屋で同じ返事を受け取っていた。

「申し訳ありません、売り切れです」

だが、十一軒目の店の通路を歩いていて、ダンはずいに見つけたのだ。棚を覆い尽くした様々な玩具に埋もれるように、たった一つだけ「セルモ」が置いてあったのだ！

ダンは眼を喜びに見開いて、「セルモ」に手を伸ばした。そのとき、彼の背後に慌ただしく迫ってくる靴音が響いた。そして、ダンが「セルモ」の背中をつかんだと同時に、もう一本の手がお人形の脚をつかんだ。

ちえっ！

ダンは、もう一本の手の主を見た。

若い女だった。

すっげえ！

半年間の禁欲生活を強いられているダンには、思わず彼女に見入った。豊かな胸の谷間をちらつかせた美人だった。とても短くタイトな黒のミニスカートに、3インチの黒レザーのハイヒールを履いていた。

「あのお……」

女は上目遣いで、媚びるように言った。

「私が先だと思っただけ……」

彼女のまごとな長い脚を見つめていたダンには、はっと我に帰った。

いかんいかん、ここはなんとしても娘のために「セルモ」を手に入れなければならないのだ。

「悪いけど、これを先に見つけたのはぼくなんだ。手を離しなさい」

女が意外そうな顔をした。ダンは胸を張って、女を蔑むような眼をした。

「そんなかつこうをして、尻を振って歩けば、どんな男でも言いなりになるとでも思ってるのなら、大間違いだ。早く、手を離せ！」

女は怒り出した。

「そつちこそ、私のお人形から手を離しなさいよ！　ずっと私の胸と脚ばかり見てたくせに！」

凶星だっただけに、ダンはますますいきまいた。

「なんだと、この雌犬！　手を離せ、さもないと……」

「さもないと、なによ！」

「怪我するぞ！」

だが、女はちつとも怯まなかった。

「怪我するのはあんたよ、間抜け！」

言うなり、女はダンの股間を膝で蹴り上げたのだ。

「ぎゃあああああ！！！！」

ダンは眼を見開き、体を折り曲げた。

だが、「セルモ」は離さなかった。

「……この、アマ……」

女はますます怒り狂った。さらにダンの睾丸に膝蹴りを浴びせた。

だが、ダンは「セルモ」を握りしめたまま、苦痛に耐えて立っていた。

女は驚いた。そんなに、このお人形がほしいの？

女は、かわいらしい膝小僧をもう一度、ダンの睾丸に叩きつけた。

それでもダンは倒れなかった。激痛が全身を駆け回り、いまにも気を失って倒れそうだった。

だが、倒れるわけにはいかない。

娘が、「セルモ」を待っているのだ！

女は一瞬、どうしていいかわからずに戸惑い、視線を床に落とした。自分の履いている尖ったハイヒールが眼に映った。

彼女はダンを見てにやつと笑った。そして人形から手を離し、わずかに後ずさった。

ダンも、勝ったと思った。わずかに気分がよくなった。彼は屈めた腰を伸ばそうとした。

それが間違이었다。

目の前のセクシーな美女の脚がすつと後ろに引かれた。ダンは恐怖に眼を見開いた。防御の態勢をとる暇はなかった。彼女は全身の力をこめて、脚の前に蹴り出したのだ。

ハイヒールの爪先が、ダンの左の睾丸を蹴りあげ、一瞬、押し潰した。

ダンは仰向けに倒れ、女は床に転がった。「セルモ」を素早く拾い上げて笑った。

「怪我するって言ったでしょ」

言うなり、今度は右の睾丸を爪先で蹴った。ダンは呻き、嘔吐した。

そのとき、店内のアナウンスが鳴り響いた。

「みなさん、いま、『セルモ』が大量に入荷されました。お待ちせいたしました。いいクリスマスをお過ごしください！」

女は狂ったように笑い出した。そして、今まで奪い合っていた「セルモ」をダンの股間に載せた。

「メリー・クリスマス！ 負け犬さん」

女は意気揚々と、団子虫のように体を折り曲げて悶絶するダンをそのままにして、入荷されたばかりの新品の「セルモ」を手に入れるべく歩み去った。